

ごあいさつ

このたびは追手門学院大学附属図書館『宮本輝ミュージアム』にご来場いただき、誠にありがとうございます。2008年秋の企画展として、「錦繡」展を開催いたします。

1977(昭和52)年太宰治賞、翌年芥川賞を受賞して作家としてスタート台に立った宮本輝は、体の不調を感じながらも、秋の蔵王を訪れました。そこで、朱色に燃える紅葉を目にした時、錦繡という言葉が心をよぎり、作品冒頭の一節が心に浮かんだと自身のエッセイ『命の器』で語っています。しかし、療養生活のため、数年間執筆活動に取り組むことができませんでした。その間も作品への情熱を絶やすことなく、1981(昭和56)年「錦繡」(新潮社1982年刊)を書き上げました。

今回の展示は、作品を深く味わう第一部と、作品のひろがりを感じる第二部で構成しています。初めてこの作品に触れる方も、何度も読まれた方も、ぜひこの機会に作品世界を感じていただければ幸いです。

今回、ホリプロからは舞台「錦繡」の写真を、蔵王温泉観光協会、山形県、やまがた観光キャンペーン推進協議会からは、山形県蔵王の写真を提供していただきました。皆さまの多大なるご協力に感謝しております。この場を借りて深くお礼申し上げます。

宮本輝ミュージアム

(文中敬称略)

紅葉は、私にとってはもはや植物の葉の単なる変色ではない。
自分の命が、絶え間なく刻々と色変りしながら噴きあげている
錦の炎である。

宮本輝「錦繡の日々」より(『命の器』所収)